

[B年] 聖霊降臨節第3主日(2022年6月19日)**【旧約聖書日課】歴代誌下 15章1～8節**

1オデドの子アザルヤに神の霊が臨んだ。2彼はアサの前に進み出て言った。「アサよ、すべてのユダとベニヤミンの人々よ、わたしに耳を傾けなさい。あなたたちが主と共にいるなら、主もあなたたちと共にいてくださる。もしあなたたちが主を求めらば、主はあなたたちに御自分を示してくださる。しかし、もし主を捨て去るなら、主もあなたたちを捨て去られる。3長い間、イスラエルにはまことの神もなく、教える祭司もなく、律法もなかった。4しかし彼らは、苦悩の中でイスラエルの神、主に立ち帰り、主を求めたので、主は彼らに御自分を示してくださった。5そのころこの地のすべての住民は甚だしい騒乱に巻き込まれ、安心して行き来することができなかつた。6神があらゆる苦悩をもって混乱させられたので、国と国、町と町が互いに破壊し合ったのだ。7しかし、あなたたちは勇気を出しなさい。落胆してはならない。あなたたちの行いには、必ず報いがある。」

8アサはこの言葉と預言者オデドの預言を聞いて、勇気を得、ユダとベニヤミンの全土から、またエフライムの山地で攻め取った町々から、忌むべき偶像を除き去り、主の前廊の前にある主の祭壇を新しくした。

【使徒書日課】使徒言行録 4章13～31節

13議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。14しかし、足をいやしていた人がそばに立っているのを見ては、ひと言も言い返せなかつた。15そこで、二人に議場を去るよう命じてから、相談して、16言った。「あの者たちをどうしたらよいだろう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することはできない。17しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によってだれにも話すなと脅しておこう。」18そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。19しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。20わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」21議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を賛美していたので、民衆を恐れて、どう処罰してよいか分からなかつたからである。22このしるしによっていやしていただいた人は、四十歳を過ぎていた。

23さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。24これを聞いた人たちは心をつにし、神に向かって声をあげて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。25あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。

『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、諸国の民はむなしいことを企てるのか。』

26地上の王たちはこぞって立ち上がり、指導者たちは団結して、主とそのメシアに逆らう。』

27事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。

28そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行つたのです。29主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語ることができるようにしてください。30どうか、御手を伸ばし聖なる僕イエスの名によって、病気がいやされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」31祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。

【福音書日課】マルコによる福音書 1章29～39節

29すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。30シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。31イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。32夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。33町中の人々が、戸口に集まった。34イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にもものを言うことをお許しにならなかつた。悪霊はイエスを知っていたからである。

35朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。36シモンとその仲間がイエスの後を追い、37見つけると、「みんなが捜しています」と言った。38イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。ここでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」39そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

歴代誌下 15章1～8節

¹オデドの子アザルヤに神の霊が臨んだ。²彼はアサの前に出て言った。「聞け、アサよ。ユダとベニヤミンのすべての人々よ。あなたたちが主と共にいるなら、主はあなたがたと共におられる。もしあなたがたが主を求めるなら、主はあなたがたに現れてくださる。しかし、もし主を捨てるなら、主はあなたがたを捨てられる。³長い間、イスラエルにはまことの神もなく、教える祭司もなく、律法もなかった。⁴しかし彼らは、苦悩の中でイスラエルの神、主に立ち帰り、主を求めたので、主は彼らに現れてくださった。⁵その頃は、出て行く者にも入って来る者にも平安はなく、すべての地の住民は甚だしい騒乱に巻き込まれていた。⁶国は国に、町は町に打ち砕かれた。神があらゆる苦しみで彼らをかき乱したからだ。⁷しかし、あなたがたは強くあれ。力を落としてはならない。あなたたちの働きには、報いがあるからだ。」

⁸アサは、この言葉と預言者オデドの預言を聞くとき、勇気を奮い起こし、ユダとベニヤミンの全土から、またエフライムの山地で攻め取った町から、憎むべきものを追放し、主の廊の前にある主の祭壇を新しくした。

使徒言行録 4章13～31節

¹³人々は、ペトロとヨハネの堂々とした態度を見、二人が無学な〔直訳→文字を知らない〕普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であることも分かった。¹⁴しかし、足を癒された人がそばに立っているのを見ては、何も言い返せなかった。¹⁵そこで、二人に議場を去るように命じてから、相談して、¹⁶言った。「あの者たちをどうしたらよいだらう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムの住民全体に知れ渡っているのです、否定しようもない。¹⁷しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によって誰にも話すなど脅しておこう。」¹⁸そして、二人を呼んで、イエスの名によって一切話したり、教えたりしないようにと命じた。¹⁹しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、ご判断ください。²⁰私たちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」²¹そこで、彼らは二人をさらに脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を崇めていたので、人々の手前、どう処罰してよいか分からなかったからである。²²このしるしによって癒された人は、四十歳を過ぎていた。

²³さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず報告した。²⁴これを聞いた人たちは心をつにし、神に向かって声を上げて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。²⁵あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。

『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち
諸国の民は空しいことを企てたのか。』

²⁶なぜ、地上の王たちは立ち上がり
君主たちは集まって
主とそのメシアに逆らったのか。』

²⁷事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族〔別訳→異邦人〕やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕〔別訳→子〕イエスに逆らい、²⁸御手と御心があらかじめそうなるようにと定められていたことを、すべて行ったのです。²⁹主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。³⁰どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」

³¹祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、堂々と神の言葉を語りだした。

マルコによる福音書 1章29～39節

²⁹一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒にあった。³⁰シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。³¹イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は引き〔直訳→去り〕、彼女は一同に仕えた〔別訳→一同をもてなした〕。³²夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、御もとに連れて来た。³³町中の人が、戸口に集まった。³⁴イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちを癒やし、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊がイエスを〔異本→イエスがメシアであると〕知っていたからである。

³⁵朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。³⁶シモンとその仲間はイエスの後を追い、³⁷見つけると、「みんなが捜しています」と言った。³⁸イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、私は宣教する。私はそのために出て来たのである。」³⁹そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・6月19日「聖霊降臨節第3主日」の日課主題は「伝道する教会」。「聖霊降臨日」以後の期節の位置づけや呼称は、伝統的な教会でも必ずしも定まらずにきた。プロテスタント系教会では、「聖霊降臨日」および「三位一体主日」を記念した後の主日から「三位一体後」の呼称で期節を定めてきた伝統があるが、近年は、「聖霊降臨日」を「復活祭」とは独立した祝いとして位置づける傾向に従って、「聖霊降臨日」の翌主日から「聖霊降臨後」の期節と位置づけるか、「聖霊降臨日」から「聖霊降臨節」の期節と位置づける傾向がある。教団の「あたらしい教会暦」は、「聖霊降臨日」から新しい期節「聖霊降臨節」としている。

・旧約日課は、「歴代誌下」から、南王国のアサ王が預言者らの言葉に従って聖所改革をおこなったという逸話の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、「第二の聖霊降臨」と呼ばれる箇所。福音書日課は、主イエスがガリラヤ湖畔の町カファルナウムを拠点に宣教活動を始められた時期のことを伝える箇所。

旧約日課(歴代誌下 15章より)

・「歴代誌」は、ユダヤ正典では「エズラ記・ネヘミヤ記」とセットで「諸書」に区分される「イスラエル正史物語」。正典「前の預言者」に区分される「列王記」と内容的に重複し、同書からの引用とされる部分も多いが、王国時代の北王国イスラエルの動向をほぼ無視し、一方で南王国ユダに関する多くの伝承を独自に伝えるなど、ユダ・ダビデ王家・エルサレム至上主義の傾向を示す編集がなされている。古い伝承では、「エズラ記・ネヘミヤ記」に描かれるエズラが著者であるとされていた。キリスト教では、古来、本書を「列王記」の補遺と位置づけて解釈されてきたが、その文書の成り立ちやユダヤ教での扱いから見て、両書には大きく異なる著作の目的があったと推察される。すなわち、バビロン捕囚後の時代(前6世紀)に、ペルシアの統治政策に基づいて「ユダヤ宗教共同体」を建設することを目標とする時期に正典として編集編纂された「律法と預言者」に位置づけられる「列王記」では、かつての南北王国を含めた「大イスラエル主義」の歴史的起源を明示する一方で、王国時代の統治者らの誤りを強調することによって、あるべき「宗教共同体」の姿を普遍主義的なものとして構想する枠組みの中で編纂されている。一方、「歴代誌」は、ペルシア支配時代からヘレニズム時代へと進んでいく時代背景の中で、事実上維持され続けた「ユダヤ共同体」の盟主としての「ダビデ王家」を中核とした民族主義的「宗教共同体」の建設という目標を正当化する目的で編纂されたと考えられる。それゆえ、関心はもっぱら、南王国ダビデ王家の歴代王の正統性や「宗教共同体」の盟主としての適任性を示すことに置かれることになったのだろう。

・日課箇所は、14~16章まで詳細に描かれる南王国アサ王の事績譚の中の一部で、預言者らの告げた主の御言葉に基づいてアサ王が聖所改革を実施したことを描いている。アサ王の聖所改革は「列王記」(上15:9~24)でも描かれていることで、このことゆえにアサ王は、南王国の歴代王の中でも、ダビデ、ヒゼキヤ、ヨシヤ各王に次ぐ高評価がなされている。「歴代誌」は、「列王記」と比べてアサ王の事績譚を大きく拡大して伝えているが、その逸話の中で「預言者」や「先見者」と王とのやり取りを組み入れると共に、「列王記」では描かれないアサ王に対する否定的とも取れる記述を加えている(代下 16:7~10)。この否定的記事は、アサ王が北王国との敵対関係の中で、北王国が同盟を組もうとしていたアラム王国と逆に同盟を組んだという歴史的出来事に対する評価に関わるもので、その判断(主を頼らなかった!)が「宗教共同体」の盟主としてふさわしくないと評価されているのである。

・日課箇所は、上述の記事とは対照的に、アサ王が預言者の告げた言葉に勇気を得て、主を信頼して聖所改革を遂行した出来事として描かれている。南王国の聖所改革は、末期のヨシヤ王時代のものが良く知られており、正典編纂上、重要な歴史的意義が見いだされる。

・「オデドの子アザルヤ」と「預言者オデド」は、親子として扱われているが、両者とも詳細は知られていない。南王国の「預言者」は、基本的に王立聖所「エルサレム神殿」の祭司職にある者であり、その中から宮廷預言者として登用されていたと考えられる。祭司職は世襲制であるが、預言者は必ずしも世襲制ではない。

使徒書日課(使徒 4章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」と共に同じ著者(グループ)によって上下二巻本の下巻として編纂された「初代教会正史物語」。復活の主イエスの約束された聖霊の降臨に基づいて、主の生涯についての証人としての「使徒」を礎とする「教会共同体」が、エルサレムの120人の集団から始まり、帝国中のディアスポラ系ユダヤ人社会とその周囲にまで展開していく経緯を、使徒ペトロおよび宣教者パウロを核に描いている。

・日課箇所は、最初の聖霊降臨によって使徒たちが宣教活動を始めて間もなくの時期、ユダヤの最高法院当局の取り調べを受けるなどした後、再び集まっていた弟子たちの集団が聖霊降臨を体験した出来事として描かれている。日課箇所自体は、二つの場面に分けられるが、共通するのは、両場面で使徒たちが、「大胆な態度」を取り、なおかつ彼ら自身がそれを求めていると描かれる点。「大胆な態度/大胆に」と訳される語はギリシア語「パッレーシア」で、「使徒言行録」中では、2:29「はっきりと」、28:31「自由に」にも用いられているなど、「使徒言行録」全体で「使徒たちの教会」を特徴づける用語となっていると言える。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの宣教活動の初期、ガリラヤ湖畔の町カファルナウムでの様子を伝える部分の後半。前半は、湖畔で 4 人の漁師を従わせた後、安息日の会堂に出入りする様子が描かれていたが、後半は、同じ安息日の午後、そして翌朝の出来事として描かれている。

・主イエスが行かれたという「シモンとアンデレの家」は、おそらく主イエスがガリラヤでの活動の初期に拠点とされていた家で、彼ら弟子の兄弟がその場所を提供していたと考えられる。彼ら兄弟は、「シモンのしゅうとめ」も同居させていたことから推認すると、漁師として相当程度の収入を得ていた比較的裕福な家族であったと考えられる。カファルナウムは、ガリラヤ湖を漁場とする漁師らの拠点として発展していたと考えられ、水産加工場の遺跡なども見つかっていることから、相当の水揚げを市場に提供しうる漁港であったと推認される。通商路の要衝にも位置し、ローマ帝国時代にはローマ軍の一個大隊が駐留していたとされる。ガリラヤ湖周辺には、ヘレニズム時代～ローマ帝国時代を通じて多くのギリシア・ローマ風の名がつけられた都市が建設されており、漁業のみならずさまざまな産業関係者が盛んに活動していた。

・35 節「人里離れた所」は「エレーモス」で、「荒れ野」とも訳され、「マルコ福音書」では 1 章と 6 章に集中して用いられている(1:3,4,12,13,35,45、6:31,32,35)。35 節「出て行き」と 38 節「出て来た」は、どちらも「エクセルコマイ」。ここでの主イエスの発言は、「自分が荒れ野に出て来たのは、(町々で)宣教するため」と解せる。カファルナウムでの活動が、会堂でもシモンの家でも、悪霊追放や病気の癒しなどに集中していたことに対して、「宣教」に活動の重心を移すと宣言された、ということなのだろう。「宣教」は、主イエスが洗礼者ヨハネから継承した活動(1:4,7,14)。

来週の誕生日 (6 月 19 日～25 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-352 番「来たれ全能の主」(= I 67 番「よろずのもの、とわにしらすみ父よ」)は、18 世紀英国メソジスト運動の中でイギリス国歌の曲に合わせてパロディ(替え歌)として歌われるようになった作者不詳の歌詞。曲は、この歌詞のためにイタリアの音楽家ジャルディーニが作曲。

・21-62 番「天にいますわたしたちの父」(☐19 番)は、「主の祈り」の歌詞に西インド諸島のカリブスの旋律が付けられた「コール&レスポンス」形式の讃美。このような形式で「主の祈り」を歌うことは、20 世紀米国のジャズ・ミュージシャンであるデューク・エリントンが宗教的ジャズ音楽の活動の中で始めたことで、メソジスト教会等で取り入れられた。

・21-393 番「こころを一つに」は、18 世紀ドイツでヘルンフォート兄弟団を設立したツィンツェンドルフの作

詞。この兄弟団の信仰は、J.ウェスレーにも影響を及ぼした。

・21-24 番「たたえよ、主の民」(= I 539 番「あめつちこぞりて」)は、17 世紀英国教会司祭で讃美歌作家のトーマス・ケンが作詞した朝の歌(21-209 番)と夕の歌(21-213 番)の最終節として作詞された頌栄(小栄光唱)。曲は、16 世紀にジュネーブ詩編歌のための曲として用いられ、まもなく英語詩編歌集 100 編に付されて広く知られるようになった曲。

21-352「来たれ、全能の主」**Come, Thou Almighty King**

1. Come, thou almighty King, / help us thy name to sing, / help us to praise! / Father all glorious, / o'er all victorious, / come and reign over us, Ancient of Days!
2. Come, thou incarnate Word, / gird on thy mighty sword, / our prayer attend! / Come, and thy people bless, / and give thy word success; / Spirit of holiness, on us descend!
3. Come, holy Comforter, / thy sacred witness bear / in this glad hour. / Thou who almighty art, / now rule in every heart, / and ne'er from us depart, Spirit of power!
4. To thee, great One in Three, / eternal praises be, / hence, evermore. / Thy sovereign majesty / may we in glory see, / and to eternity love and adore!

21-393「こころを一つに」**Herz und Herz vereint zusammen**

1. Herz und Herz vereint zusammen / sucht in Gottes Herzen Ruh! / Lasset eure Liebesflammen lodern auf den Heiland zu! / Er das Haupt, wir Seine Glieder, / Er das Licht und wir der Schein; / Er der Meister, wir die Brüder, Er ist unser, wir sind Sein.
2. Kommt, ach kommt, ihr Gnadenkinder, / und erneuert euren Bund, / schwöret unserm Überwinder / Lieb und Treu aus Herzensgrund! / Und wenn eurer Liebeskette Festigkeit und Stärke fehlt, / o so flehet um die Wette, bis sie Jesus wieder stählt!
3. Legt es unter euch, ihr Glieder, auf so treues Lieben an, / daß ein jeder für die Brüder auch das Leben lassen kann. / So hat uns der Freund geliebet, / so vergoß Er dort sein Blut; / denkt doch, wie es Ihn betrübet, / wenn ihr euch selbst Eintrag tut.
4. Halleluja, welche Höhen, welche Tiefen reicher Gnad, / daß wir dem ins Herze sehen, der uns so geliebet hat; / daß der Vater aller Geister, der der Wunder Abgrund ist, / daß Du, unsichtbarer Meister, uns so fühlbar nahe bist.
5. Ach Du holder Freund, vereine Deine Dir geweihte Schar, / daß sie es so herzlich meine, wie's Dein letzter Wille war. / Ja verbinde in der Wahrheit, die Du selbst im Wesen bist, / alles, was von Deiner Klarheit in der Tat erleuchtet ist.
6. Liebe, hast Du es geboten, daß man Liebe üben soll. / O so mache doch die toten, trägen Geister lebensvoll: / Zünde an die Liebesflammen, daß ein jeder sehen kann: / Wir als die von einem Stamme / stehen auch für einen Mann.
7. Laß uns so vereinigt werden, wie Du mit dem Vater bist, / bis schon hier auf dieser Erde / kein getrenntes Glied mehr ist. / Und allein von Deinem Brennen / nehme unser Licht den Schein; / also wird die Welt erkennen, daß wir Deine Jünger seien.